アシュラム ASHRAM

2018.12 月第 601 号

発行所　アシュラムセンター
523-0894 近江八幡市中村町 567-2
Tel 0748-33-4030
Fax 0748-33-8856

アシュラムセンターホームページ
www.ashramcenter.jp

編　集　アシュラム誌編集委員会

振　替　01050-6-53772
アシュラムセンター

印　刷　明文舎印刷商事（株）

解　題

アシュラムとはインドの言葉で「退修」という意味で、スタンレー・ジョーンズ博士によって日本に紹介されたものであります。祈りの生活をもってみ前に自らを整え、今日に於ける主のご委託にこたえんというのがその願いです。

瞑想

更にわたしはまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。

黙示録21：2

主幹牧師　榎本　恵

聖書には、2つの「新しい」という言葉があるそうだ。有名な「新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるのだ」（マタイ9：17）に使われる「新しい」とパウロがコリントの手紙の中で語った「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」（Ⅱコリント5：17）の「新しい」とでは、全く別の言葉が使われているという。前者がいわゆる、時の流れによって自然と古びていってしまう「新しい」であるなら、後者は、時に関係なく全く質的に異なる「新しい」なのだという。あえて表現するならば、片方は、「時という制約の中にある新しさ」であり、もう片方は「神という全く制約のない新しさ」とでも表現しようか。いずれにせよ、どんなものでもいずれは古びてしまう時の流れの中に、神は決して古びることのない「新しさ」をくさびのように打ち込まれた。そして私たちはその神の「新しさ」の来ることを待ち望み続けている。

ではその決して古びることのない「新しい」とは一体どういうものなのだろうか。黙示録の著者が見たという天から下って来る、夫のために着飾った花嫁のような「新しいエルサレム」とはどんなものなのか。黙示録21章には、それを様々な言葉と比喩を持って描いている。しかし、それは読めば読むほど、私たちを混乱に陥れる。そして私たちは呟くのだ。「そんなものはいくら考えても分かるわけがない。そんなことで頭を悩ますより、この世で愛と奉仕の業を行い、祝福と繁栄を求めようではないか」と。確かにその通りである。自分自身が見たこともないものを想像や知識だけで、語ることは危険なことである。それは、いずれ来た時には、必ずわかるものなのだから。けれども、果たしてそう嘯いているだけで良いのだろうか。

かつて中世のキリスト教神学者たちは、復活した者たちは一体何歳になっているのかということに頭を悩ませていたという。60歳で死んだものは、60歳の姿のまま、この新しいエルサレムの通りに現れるのか、幼い子どもは、一体何歳になって新天新地に現れるのか、考えてみると愚かな疑問のように思われるが、彼らは真剣に思考し、議論し、ある一つの結論へと向かっていったのだという。11世紀にパリ大学の神学者として活躍したペトルス・ロンバルドゥスという人はこんなことを書いている。「生まれてすぐに死んだ男の子は、彼が30歳まで生きながらえたなら達したであろうそのかたちへ、彼自身の体に何一つ妨げられることのない（かたちへ）と復活するであろう。」（「天国における人類の出現について」）

どんな幼子も、どんな年老いた人も、復活の時は、30歳の姿になっているというのである。どうかバカバカしいと読むのをやめないでほしい。なぜならその根拠は、キリストが十字架によって天に召され復活した時の年齢がおおよそ30歳であり、「この年齢こそが完全な年齢であり、天国において栄光のうちによみがえらされた者たちの外見上の年齢であった。」と考えたからなのだ。使徒パウロは、「死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか」と問うコリントの教会の人々に向かって、「愚かな人だ」（Ⅰコリント15：35）と言い、「天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。」（Ⅰコリント15：48）「ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。」（Ⅰコリント15：52）と喝破した。永遠の命を得、朽ちないものを着、栄光の主の似姿に変えられる。それを中世の神学者たちは、30歳と定めたのだ。

友よ、私たちはこれほど、確かに「新しいエルサレム」を思い描き待ち望んでいるだろうか。パウロの話す復活の出来事を鼻で笑い、「それについては、いずれまた聞かせてもらことにしよう」（使徒17：32）と去っていったアテネの人々のようになっていないか。見えないものを見ているように、決して古びることのない神の新しさを見ていこうよ。

第6回 オリーブの里アシュラムに参加して（九月二六日～二八日）

伊達知恵

主題聖句『神のなされることは皆、その時にかなって美しい（伝道の書3：11）』

オリーブの里アシュラムでは、伝道の書1～3章の御言葉に静聴し、共に分かち合い祈る時が与えられたことに感謝している。日々の中で『何か大切なことをみつけたい、つかみたい』と探し、見極めようとしていた私に『風は南に吹き、巡って北に吹く。巡り巡って風は吹く。しかし、その巡る道に風は帰る。（1：6）』の御言葉がスッと入ってきた。

『日の下に行われるいっさいの事について知恵を用いて、一心に尋ね探り出そうとした（1：13）』コヘレトは、『日の下で行われたすべてのわざを見たが、なんとすべてが空しいことよ。風を追うようなものだ。（1：14）』と言っている。

つかめない風を追うことは空しく、日々の中で何かをつかもうとすることに似ている。

しかし私は、6節の〝風〟からはその中にある大きな存在を感じた。

風は確かにつかめないし、つかもうとしている時は、風が〝ある〟ということに気づけないのではないか。風を追うことをやめて、体全体で風を受ければ、確かに風はここに〝ある〟と感じられる。神さまの恵みもつかもうとしたり追うのではなく、受けるものなのではないか。風は南へ北へどこにでも吹き、巡っていって帰ってくるように、神さまの恵みも、南へ北へどこにでも吹いていて、巡っていって帰ってくるのではないか。そう思った時、空しいと思っていた私の心に『私は〝ある〟』と語られた神様を見つけたような気がした。

日々、色んな〝時〟があり、その中で隠されているように感じる神様の恵だけれど、どのような時でも〝神の時〟であると信じ、神様の恵みを受けながら歩んで行きたい。

（日基・京都丸太町教会）

修道場出発し、現在、長野・共働学舎に。

イエスは主なり♪

第44回 新潟一泊アシュラムの恵み

吉澤昭男

9月14日（金）～15日（土）と今回も新潟市の郊外の「メイワサンピア」で開かれました。テーマ（主題聖句）は、「神のなさることは、すべてときにかなって美しい。」（コヘレトの言葉3：11・新改訳）で、奉仕者はアシュラムセンター榎本恵師でした。

榎本恵師は、妹のてる子さんを天に送るという経験の中で、この夏はどこにも出かけず「生と死」について考える時となった、との事であります。7月の西日本豪雨災害で、多くの方が家を失い、また、家族を失い、生活を奪われました。アシュラムの関係者の中にもそのような方々がおられます。会社が水没し、大変な損害を受けました。そんな中で「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。」と単純に言い切れるものか、との問題意識が感じられました。

今回の出席者は、24名、初参加の方が2名、一泊アシュラムは初めてという方も3名おられました。一方、実行

ご献金者
敬称略
9月分
第23回
北陸・富山
アシュラム
金山　良雄
渡辺美寿子
中谷　哲造
金田　健一
金田　和子
植松喜美子
越智　千歳
上柿　京子
香川　孝子
佐賀　昭子
山田喜久子
吉田恵美子
正岡リツコ
榎本　和子
橋本るつ子
引原　勝美
山岡　義明
桶川聖書教会
常任運営委員会
亀井　ヨシ
阪神
ミニアシュラム
村瀬　俊夫
沖田　朝子
古田　光子
沖田　和恵
吉川　聽子
明石シオン
（8月分含む）
市川　紳司
チャイム・
コンソート
（池田
チャイムの会）
福岡聖書教室
森　よし子
菅原　博
雀部喜久子
明比　信子
松本ナツ子
持田　澄子
脇　萬里子
村椿　洋子
鹿屋
キリスト教会
大阪聖書教室
品田　勉
鹿児島
アシュラム
事務局
カフェちいろば
聖書入門講座
大山　悠子
榎本　恵
榎本　康子
榎本　光太
河村　琢郎
河村　耐子
関澤　淑子
加々美　要
センター
聖書教室
世戸　宏子
国則　美琓
岡本　孝子
横山　宜和
ちいろば
牧師記念
チャペル夕礼拝

委員長の大森隆兄、本田由美子姉が召天され、夜の「団らんの時」に、二人の天上の友を覚え、祈りの時を持つことが出来ました事は幸いでした。

開会礼拝では、「死はさなぎの形である。」「みにくいものでもおそろしいものでもない。」「さなぎからチョウチョに変わるようなものである。」ミケランジェロの言葉に「生がいいものだとわかれば、死もいいものだ。生も死も同じ匠（たくみ）によって造られたものだから。」「神のなさることはすべて時にかなって美しい。背後にある神のことばに聴こう。美しいものを見つけて行こう。」の語りかけが心に残りました。

静聴の箇所は、コヘレトの言葉1～3章でした。アシュラム集会ではなじみの少ない聖書箇所のようでしたが、私にとっては、かつて高校生の頃、教会に導かれた時コヘレトの言葉を読み、人生について考えるときでもあり、天地の創造者である神への信仰に目が開かれた思い出の書でもあります。また、後年、母が77歳で天に召された時（母はその前年洗礼を受けていた。）「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。」とのみことばが心に響いてきたことは忘れることが出来ません。

充満のときは、第2コリント15章が開かれ「復活のいのち」について「朽ちるものが、朽ちないものに復活する」（42～44節）霊的事実を力強く語っていただきました。パウロは復活を信じることが福音の中心であると言っています。私達は復活を約束されたものとして、希望を持って生きて行きましょう。

（新潟聖書教会）

アシュラムの恵み その3　榎本恵主幹牧師との出会い

常任運営委員　山岡義明

3年前の2015年11月に和子先生は、90才になられた時、自伝「ちいろばの女房」を出版された。その中で、保郎牧師召天後に、「アシュラムの働きが途絶えなかったのは、多くの人々が神様に促されて献金をして下さり、神様に押し出されて色々なご奉仕をして下さったからである」と書いておられる。

岡崎姉からは事務や会計処理を学ばれ、田中師召天後は、浦口姉と共に毎月の会計報告のための資料を作成され、献金をして下さった方々に、感謝のメッセージと共に領収証を送付しておられたのです。多い月は400人以上にもなったそうです。

私は田中師の年頭アシュラムで常任運営委員となり会計報告書の作成を毎月ご奉仕させていただき、もう15年になる。委員会の前日ホテル泊でアシュラムセンターで和子先生と親しく交わり、保郎師の思い出について沢山お聞きすることができ本当に恵まれました。心に深く残っているのは、保郎師が淡路島出身なのでよく言われていたのは、「淡路島に住んでいる人達は海底ケーブルで送られてくる電気によって恵まれた生活ができている。信仰者もいつも神様とつながっていて、祈りによって神様からの恵みにあずかれることを自覚し、感謝の思いをもって生活しなければならない。アシュラムはそのことをおすすめする働きであり、み言葉に聴き、祈ることによって神様からの霊の力がいただける」ということでした。私も17年連続で年頭アシュラムに出席させていただき、アシュラムの働きとつながらせていただき、多くの祈りの友に支えられて信仰生活60年、82才の今日を迎えられたことを感謝しています。和子先生も90才を越えても「火の玉のようになって主に仕えた主人にふさわしい『ちいろばの女房』としてこれからも主の御用をさせていただきたい」とお元気におっしゃっておられます。感謝！

（日本バプテスト同盟　大阪神愛教会）

井上　達夫
榎本　和子
橋本るつ子
向井　浩子
静岡聖書教室
池谷　治朗
安仲　萌子
東京聖書教室
溝井
無　名　氏
森山　直子
川尻　頼子
吉田すみゑ
西川　　武
加太アシュラム
東　　典子
米田　康子
米田　歌子
城　喜久雄
堺大浜
キリスト教会
新潟
アシュラム
日光
オリーブの里
アシュラム
73口
¥852,440

ヨセフ基金（義援金）
榎本　和子
橋本るつ子
島田　洋子
ちいろば
アッちゃん・シュラム君
吉田すみゑ
5口
¥35,000

新修道場のために
たぴんちゅ牧師
1口

会堂改築のために
鍬田　速明
1口

るっちゃんるんるん福音食堂のために
メヌエットおばさん
1口

合　計
81口
¥896,440

尊いご献金、ご献品、お祈り、お便り、電話メッセージ、そして、共にアシュラム！感謝いたします

静まりの世界への主の御導き（5）

証　唄野 隆・絢子ご夫妻
（堺大浜キリスト教会）

主の前に静まるのは、群衆の中の一人としてではなく、ただひとり主の前に出ることが大事だが、それは自分の黙想にふけることではない。主の御前に立つのである。それも、自分の理解している主の一面だけを見ることでは不十分である。主御自身の御前にひれ伏すのである。その主は聖書全体を通して示されている。だから主を知るには聖書全体を読むことが基本である。私は、KGKで静思の時を教えられ、毎日、聖書を読み祈るようになり、聖書全体を通読するように指導された。そして、アシュラムを通して、全身全霊をかけて主に聴く姿勢を示された。さらに、榎本先生は、毎朝、早天を守るように父を励ましてくれた。父は1年ほどの準備の後、1976年の元旦から早天を始めた。そして、1981年1月、小宮山林也先生が来てくださったとき、一日一章を始めるように強く励まされ、その年の3月から大浜キリスト教会聖書一日一章が始まった。こうして、聖書全体を通して主を知って行く道に導かれたのである。

ここで交代。アシュラムのこと、父のことについて絢子が話す。・・・最近出た榎本保郎先生の『聴くこと、祈ること』を手にしたとき、まず、恵先生が「わが父、榎本保郎は・・・」と尊敬と信頼をもって書きだしておられるところを読み、伊丹空港で、保郎先生の遺骨を胸に抱かれた高校一年生だった恵先生が「これからも父の文章やテープを通して多くの方々が教えられることでしょう。」と御挨拶された一言を鮮明に思い出しました。本の第一章は「宝の箱をあけて」ですが、キリストの愛を受け、それに気づくところから信仰生活が始まり、キリストの愛にならう生き方が身についていくことが語られています。イエスさまは、何がいちばん大事かと聞かれたとき、神を愛し、隣人を愛することが大事だと答えられ、誰が私の隣人かと反問されて、あなたが誰の隣人となるかが問題だ、と言われました。愛とはその人の隣人になることなのです。榎本先生が私たちの家に御泊りになったとき、食卓で義父の横に座って、「唄野さん。早天せなあかんで。」と迫り、その気のなかった義父が、「それなら一週間にいっぺんぐらいやってみまひょか。」と答えると、「そらあかんわ。毎朝せな。」と言われました。それから義父はしばらく時間をかけて生活パターンを朝型に変え、次の年の元旦から早天を始めました。それが義父の信仰生活を変える力になりました。榎本先生は義父の隣人となってくださったのです。愛とは隣人になる力で、それは神からのもの（1ヨハネ4：10）、神からの賜物です。ここに「愛に根ざし愛を基として」と書かれた榎本先生の色紙があります。義父の部屋をリニューアルしたので、先生に色紙を書いてくれませんかとお願いしたら、書いて送ってくださったものです。日付を見ると先生が最後のブラジル伝道で出かけられる1週間前になっています。出発前の忙しさの中で精魂こめて書いてくださったのだと分かります。ブラジルに発たれるのを見送った義父に「唄野さん。アシュラム頼むで。」と言われた一言が先生の遺言となり、義父は天からの召命と受け取ったようです。そのとき、義父69歳、榎本先生52歳、そのときから、父の心は近江八幡に向き、アシュラムに向きました。からだが衰えてきたとき私たちは一人で近江八幡に向かうのを心配し、休むことを勧めましたが、義父は聞きませんでした。台湾アシュラムにも何度も行き、90歳のときも参加しましたが、もうからだが動かなくなったとき、介護している私に「去年、心筋梗塞になったので、もう飛行機には乗せてもらえんから、船で行こうと思うんや。」と言うのを聞いて驚きましたが、義父の夢に付き合おうと思って、「そうですね。結婚されたときも最初の赴任地シンガポールまで船で行かれたのでしたね。」とお話したことでした。後に、義父は、自分の人生の節目となった三つの出来事は、①シベリヤから帰国できたこと、②榎本先生と出会たこと、③義母が弱ってきたとき義母に向き義母に仕える方に方向転換したことの三つだった、と話してくれました。

（つづく）

⬅今月は生活記お休みです。サックス練習、いえ仕事多忙のため…平和より皆様へ感謝の美しい音を♪

⬅新メンバー琢郎じい。(康子の父)修道場の若者達と干し柿作り。移住直後の妻の帰天。“涙をことごとくぬぐい取って下さる(黙21)”方を仰ぎつつ。

「ナザレびと　思ふてをれば　ペチカ　燃ゆ」

松平吉生兄（十年程前、Wハウスにて、賛美の会にご夫婦でご参加の折）

皆様に
愛と感謝をこめて・・・

榎本 てる子師

今年４月始めのフェイスブックより　抜粋

私も病に倒れて以来、自分の回復は愛し愛されるなかで起こって来ていることを確信しており、どんな人にもこのような交わりが必要なんだと思いました。人との交わりは、いいことだけではないと思います。嫌なこと、腹立つこと、いっぱいあります。私にもあります。でも、そのことを考えると呼吸も乱れ、息をしにくくなり、自分のからだを攻撃してしまい、苦しいだけで何一ついいことありません。だから、そんなことに自分の時間を使うのはもうもったいないので、手放し取り込まないようにしないと自分のいのちに関わると思えるようになって来ました。時々なんかを聞くと動揺して、自分が取り込み、呼吸が乱れます。が意識的に考えることをやめようとしています。今の病院生活は、それができる環境を※神たまが与えてくれてます。ありがたいです。愛し愛される環境が一つあることが大切なんだと思いました。その環境をお互いにつくっていける、そんな思いを分かち合える人たちがそこらへんで増えまくったら世の中もう少し楽になるんじゃないかと。私もいろんな人から愛することについて学んでます。

※…神様

愛とは、その人の存在を思うこと
愛とは、その人に思いを伝えること
愛とは、その人が喜ぶことをさりげなくすること
愛とは、暖かい手
愛とは、待ってくれること
愛とは、祈ること
愛とは、その人が一番恥ずかしいと思うことを、大丈夫やでと言ってしてくれること
愛とは、その人のようにはなれないけど、なろうとしていることが伝わること
愛とは、美味しいご飯を運んでくれること
愛とは、笑わしてくれること
愛とは、日常を運んでくれること
愛とは、私とちゃんと向き合ってくれること

⬅昨年９月
GOGO（55才）パーティー
京都バザールカフェにて

愛とは、こんな長いうんちくFBを読んでくれたり、コメントくれたり、自分の体験を分かち合ってくれたりしてくれてること

など、私にとっての愛の数が増えています。みなさんにとっての愛はまた違うかもしれません。違うから、いいんだと思います。違うから、合う人が愛を捧げるし、また違う人の愛の感じ方をしることで愛に羽根が生えて羽ばたけるのかもしれません。

でもやっぱり、人との交わりが私には必要みたいです。でもどんなに交わりがあっても、一人で立たなければならない場所があります。そこがどこなのかを学ぶ時間を今与えられています。ヘンリーナウエンの感じた孤独の意味を味わっています。

私にとってのスピリチュアルケアは、もう理論云々より、愛し愛される中で、全ては関係性のなかで人は変わり、成長し、癒されるんだと思ってきてます。愛についてもっと学んでいきたいです。（今年４月25日召天55才）

1991.8月　榎本保郎師記念会　世光教会にて
親族と共に。前列 右・てる子師
子どもとの遊びもダイナミック!!

河村耐子姉（榎本康子の母）
夫婦でのメロンパン作りを思い出に…。
賛美に包まれ天上へ。
センターにて初の葬送式、感謝。

「卒寿すぐる　ちいろば夫人　胆嚢の全摘手術も　委ねの姿」
小林佳子姉、歌集　であい　第二集　〝ちいろばファミリー〟より（前常任運営委員）

12月の聖書教室など

1(土)	広野祈りの家（兵庫県三木市志染　猪瀬姉宅 PM1:00）
6(木)	常任運営委員会（アシュラムセンター）
7(金)	阪神ミニアシュラム（主恩教会 PM1:00）
8(土)	合同聖書教室・クリスマス愛餐会（アシュラムセンター AM11:00） 大山謙一シェフ（カフェちいろば）の手料理あり　**どなたでもどうぞ**
10(月)	福岡聖書教室（博多クリオコートホテル PM1:30）
16(日)	ちいろば牧師記念チャペル夕礼拝・愛餐会（PM5:00）
18(火)	大阪聖書教室（大阪クリスチャンセンター AM10:30）
19(水)	カフェちいろば聖書入門講座（京都・伏見区深草 PM1:30）
24(月)	静岡聖書教室（旧・英和女学院宣教師館 PM2:00）
25(火)	東京聖書教室（御茶ノ水クリスチャンセンター４F AM10:30）
25(火)	桜美林リトリートアシュラム（桜美林大学荊冠堂チャペル PM2:30）

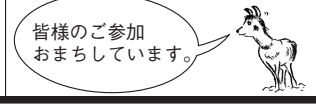
１月のアシュラム予定

1/24(木)～26(土)

第44回 年頭アシュラム（関西セミナーハウス）
主題「ただし、わたしとわたしの家は主に仕えます。」
ヨシュア 24：15

奉仕者　榎本恵師
岡山敦彦師
（大分恵みキリスト教会）（日本アシュラム連盟理事）
「信仰の眼で読み解く絵画」著者（いのちのことば社）

★詳細は、案内チラシをご覧下さい
0748－33－4030　アシュラムセンター



お申し込みは なるべく１月12日（土）までに！

２月以降のアシュラム予定

２月２～３日	呉アシュラム
３月１～２日	ブラジルアシュラム
３月３～５日	ルージラモスアシュラム（ブラジル）
３月９～10日	ブラジリアアシュラム
３月17日	ＪＡＵＣ（ニューヨーク）ミニアシュラム

山は動く

「信じたら山は動く」と
主イエスは言われた
でも
動かない
けれど
主の約束のゆえに
今は動かない悲しみの山を
じっと見つめて
待ち望む

貝出 久美子
（徳島聖書キリスト集会）
詩集「イエス様の手」より

みことば

下妻シャロームキリスト教会牧師
山本　悦子

列王紀下４章～５章
「 エリシヤの奇跡 」

この世の生活と訣別し、預言者に召されたエリシャの働きが列王記下に記されており、４章にはエリシャが行なった四つの奇跡があります。

第一に（４：１－７）寡婦の油をふやしてその一家を救ったこと。

第二に（４：８－31）シュネムの婦人の子をよみがえらせたこと。

第三に（４：38－41）野うりの毒を消したこと。

第四に（４：42－44）20個のパンで100人に食を与えたこと。

その何れも、神の助けなくしては出来ないことでした。

続いて、５章に入るとナアマンの癩病の癒しが伝えられています。

エリシャは使いの者をやって、こう言わせた。「ヨルダン川に行って七度身を洗いなさい。そうすれば、あなたの体は元に戻り、清くなります。」ナアマンは使いの者を来させたことに怒り、更に泥川のように汚いヨルダン川で７度も身を洗えなどと何たることかと憤慨するのです。清く澄んだ川はいくらでもあるではないか。何故この汚い川に、しかも７度もつかるとは。しかし、家来に促されて泥川で７度身を洗うと、どうでしょう。赤ちゃんの肌のように滑らかになったのです。

ナアマンは嬉しさの余り、相当のお礼をしたいと申し出ると、エリシャは辞退するのです。

ナアマンの病気を癒したのは神であって彼はただ神の器として用いられたに過ぎない。報酬を受ける資格がないことを示し、これによって真の神の預言者として偶像の預言者との相違を知らせようとしたのです。

あとがき

クリスマスおめでとうございます。しかし正直、私にとりましては、今年のクリスマスを素直にお祝いすることができないものであります。４月に妹を、また11月には、妻の母を天へ見送りました。悲しみや寂しさは、時とともに薄れて行くかもしれません。しかし大事なものを失ったという喪失感はなかなか消えるものではないのです。同じ星を見上げても、あの東方の博士たちのように喜びに溢れることがなかなかできないものです。しかしそれでも、そのただ中に救い主はお生まれになった。「それでも、おめでとうと言おう。」今年も、そして来たる年も、皆様方の上に、そしてこの世界の上に、希望という輝きのぼる星の光を見つけていきたいです。（恵）